

さざんか

森谷佳子

目覚めても戦争は終わっていないのだ 三月の空の果ては見えざり

出席簿を抱え教室がわからない 夢から覚めて長き息吐く

耳元にささやくような鉦叩かねたたき何の合図か知れないけれど

老いゆけば成熟するとは幻想と知ってしまいぬ 十分老いて

秋ひとつ越えむとするとき幾つものノスタルジアを飲み下している

山茶花の墓場のような散り花の艶めく地面の夕暮れてゆく

さざんかの白き花散りさざんかの紅き花散りななぞじになる

百年のユーカリの奥に鈴鹿嶺の蒼き峰々控えていたり